
異世界(。´・д・)エッ

CAT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界（。・D・）エッ

【Nコード】

N0305Z

【作者名】

CAT

【あらすじ】

異世界に迷い込んだ九十九^{つくも}めんどくさがりな彼は楽しい異世界ライフを満喫する為にチート能力と補正で様々な問題を解決していく物語まあとはいっても彼元々地球でもおかしい人間なんだけどね

残酷描写ありってことにしてるけどどうなるか

やっぱ補正だな

俺は目を覚ますとそこは森の中だった・・・

「ここどこだぁー」

まあとりあえず叫んでみる

「・・・」

うん、だれもいないのか昨日俺は自宅のベッドで寝ていたはずなんだけどな

「まあ、いいか」

あれか・・・あれなのか・・・

まずはじめに俺は右手の拳を握り締めちよつと力を込めて近くの木を殴ってみた

ドゴーーーン

殴った木は木っ端微塵に

次は飛んでみるかなと

俺はかるーくジャンプしてみると

うんうん

約10メートルぐらい飛んでいた

あ・・・これ着地痛いかも

ド――m9（＊＼＼＊）――ン！！

ふう大丈夫みたいだな

やれやれやっぱ肉体が強化されとるな

俺はストレッチしながらとりあえず歩き出した

森を適当に歩く俺の前に悲鳴が・・・

聞こえてこなかった

人が通る道に出たのはいいけどだれもいないって

まあ異世界じゃそうなんだろうな

「おい、餓鬼金目の物だしな」

山賊さん3人が俺に声をかけてきた

「はぁ最初に出会ったのが山賊ってかわいい女の子にして欲しかったわ」

「なにいつて・・・」

めんどくさいので俺は山賊さんが何か言う前に動いた

ぐだぐだいらん言い合いしても結局殺すことになるんっだし無駄無駄

俺は山賊の一人が腰にさしている剣を奪うと彼らの首を切り落とした

え、人殺すのに躊躇しないかって

うん、言っていなかったな俺元傭兵だし地球でねv(´・ω・´) キ
ヤピィ☆

とりあえず彼らの体を探ることに

はあほんと貧乏だな、まあ金がないから山賊なんかしてたんだろう
けど

三人合わせて銀貨3枚に銅貨24枚って価値わからんけどきつと少
ないな

まあないよりましか、俺は彼ら剣二個を奪いまた歩き出そうとした

「死ね山賊」

いきなり鎧を着た騎士風の女に切りかけられた

まあ避けたけど、てか山賊の死体を漁って山賊に間違われるって

というかいきなり切りかかるなよな

「いきなり切りかかるなよ俺は山賊じゃねーし」

「貴様死体からなにか奪っていたではないか」

「襲われたから返り討ちにして金目の物もってないなかって探ってただけだろ」

「それは冒険者がすることか」

「いや俺冒険者じゃないし」

「やはり山賊か」

「はぁ（´・Д´・）ウザ・・・」

めんどくさいからかるーく気絶させてみた

うん いい感じで気絶

「き、貴様」

なんかすっごい睨んで何か言おうとしてたな

嫌いになり襲ってきた奴にそんな目で見られても

とりあえず道に彼女を置いていくのもなんだし誤解解く前に町まで言っただけがー

言われるのもめんどくさいので彼女を担いで森に戻ることにした

女騎士

さてこれからどうしようかな

森に戻った俺は

女騎士さんの荷物から紐を取り出し木に縛ってみました（・▽・）
ニヤ

近くに川があったので山賊を殺した返り血を洗い流して戻ってみると

女騎士さんが目を覚ましてこちらを睨んでいます

うんうん、そりゃ睨むよね

ああ口には布かませてるよ、だってなんかしゃべられたらうるさいし

「さて女騎士さん、俺は九十九今から君に聞きたいことあるから布
とるよ大声とか出さないでねべつになにかするってわけじゃないか
ら」

女騎士さんはなんか頷いてるので外してみる

「君の名前は」

「私はセリアだ、冒険者だ今に仲間が助けに来るぞ早くこの縄を解
け」

「えーとそこはまあ聞いてないけど、そうなると君を殺さないと

いけなくなるな」

「な。なんで貴様」

「君が死ねば問題ないだろ目撃者もないんだし、てか君は俺の質問にだけ答えればいいんだよ」

剣を彼女の首元に当ててみた

「まあ殺す気はないんだけどね、俺は旅人で元傭兵で今は迷子で道に迷っていたところ山賊さん達に囲まれて仕方なく殺したんだよ」

まあ本当はめんどくさいから殺したんだけど

「それでこの近くに町ってあるの」

(o・v・o)ニコッ♪って感じで聞いてみたんだけど

彼女は睨みながらだまってしまった・・・

「んーしゃべってくれないと困るんだよね」

「・・・」

ガサガサ

音がしたので周りを見てみると

なんか知らない間に狼ばい生き物達に囲まれていた

「はぁめんどくさいな」

「お前、ブラウンファングの群れだぞ早く私の縄を解け殺されるぞ」

彼女がなんか言ってるけど無視して俺は持っていた剣をかるーっく水平に振り抜いてみた

やっぱできたかてか剣が折れてる木ごと狼もどきを切ったからな

彼女は目が点になっている

「で、話の続きなんだけど近くに町ってあるのかな」

「いや、お前その前に今のはなんだ」

「質問してるの俺なんだけど・・・」

彼女はなんか睨みながらも答えてくれた

「北に3時間ぐらい歩けばベルーラの町に着くはずだ」

「そっかそっかようやく話が出来た、じゃあ次の質問君冒険者って
いうけど冒険者はだれでもなれるのかい」

「そんなことはだれでも知っているだろう」

「いや俺はべつの大陸から着たから冒険者っていうのわかんないんだよね」

たぶんギルドとか登録したらだれでもなれるんだろうけど一を聞いてみた

「そうか、冒険者ギルドで登録したらだれも冒険者になれる」

「そっかそっか、ありがとそれじゃ」

歩いて立ち去ろうとする俺を見て

「お前待て私をここにおいていくつもりか」

俺はしばらく考える振りをしてから

セリアの縄解く

「あ、でも襲ってきたら殺すからねV（ゝω・ゝ）キャピイ☆」

彼女にそういうと俺は彼女を縛っていた紐を剣で切ってあげた

さて町まで行くかな

「まてまてお前私の武器と荷物を返せ」

「え、突然襲ってきた君がなにを言ってるの生きてるだけいいじゃ

ん」

「そ、それは貴様が怪しかったからだろ今でも怪しいが」

俺はしかたなく彼女を連れてだってベルーラの町へ向かうことにした

セリアが仲間になった？

俺は女騎士ことセリアとふたりベルーラの町へ向かった

まあ彼女がうそついてる可能性もあるからこれでいいんだけどね

「・・・」

「・・・」

無言だ30分ぐらい歩いてるんだけどセリアは無言だ

「セリカってBランクなんだ結構強いんじゃない？」

「なぜ、貴様がそんなことを知っている」

「いや、君の荷物の中のギルドカード？に書かれてるから」

「私の荷物を返せ・・・」

「いやもう俺の出し・・・でも返してあげてもいいよ」

「本当か」

本当は返そうと思ってたんだけどなんだが生意気だったし

「ただし条件がある」

「条件だとそれは元々私の物だぞ」

「嫌ならべつにいいよ」

「わかったその条件というのをとりあえず聞いてやろう」

なんかさっきから偉そうなんだよな武器も持っていないくせに

俺が取り上げたんだけどね。(。´ p q´)クスッ

「俺迷子だって言ったよね、だから町で教えてもらいたいんだよね」

「それは私に従者になれってことか」

「ん、いやしばらくの間、町で生活する事になると思うから教えて欲しいんだよね」

「それだけでいいのかというか私が町に着いたらお前を捕まえるとは思わないのか」

「ん、そんなことしたら君間違ひなく死ぬよ、それでもいいなら俺を捕まえようとしてもいいけど」

「・・・わかった条件を飲もう」

彼女が首を縦に振ったと同時に俺は彼女の剣と荷物を投げて渡してあげた

というか武器と荷物重くはないけど邪魔だったんだよね両手ふさがるし

「あ、ありがと武器までいいのか」

「邪魔だし俺まだ山賊から奪った武器もあるし一本だけだけど、それに力量ぐらいわかるだろ」

それにしてもあれから2時間近く歩いてもだれともすれ違わない山賊とか出たらめんどくさいけど、そんなことを考えながらベルーラの町が見えてきた

「あれがベルーラの町だ九十九」

「おう、まあ見ればわかるけどなセリアがたってたし」

それにしてもセリアって可愛いよな髪の毛は真っ赤で瞳はくりっとした真っ赤

鼻もすーとして顔も整ってるしスタイルもいい胸は鎧で隠れちゃってるけど

さらしでも巻いてるのかな（・ω・、）

「わ、わたしは胸もあるぞ」

「Σ（・ω・ノ）ノえっ！声に出してた、っていうか否定するところそこそこの」

なんか頬が赤くなってる気がするけどどうなんだこれ

異世界の女性はそういうものなのかなっと思いつながらブルーラの町へたどりついた

ギルドだよ

「ここが冒険者ギルドか」

俺は巨大な建物の前に立って呟いた

ベルーラの町についてギルドまで向かう途中いろんな人がセリアに声をかけていなあ

おばちゃんおじちゃん冒険者風のおっさんに兵士ばい奴までセリアって有名なんだなたぶん

「九十九早く行くぞ」

そういつて建物の中に入っていくセリア

建物の中に入るとそこはイメージしていた酒場ではなくどこぞの役所ぽかった

「セリアさんお帰りなさい今日は街道にでる賊の討伐に行っただと思っただんですか、もう終わったのですか」

と猫耳の受付がセリアに話しかけていた

「あ、そうだった私がついた発見した時に賊は死んでいたんだが証拠かあ」

セリアは頭を抱えて黙ってしまった

「おいセリアこれ証拠になるか」

俺は盗賊の死体から盗んだ財布の中に入っていたギルドカードぽいのをセリアに手渡した

「おおカード持ちだったのか、それでかまわない」

そういうとセリアは俺からカードを受け取ると受付の猫耳に手渡した

「ちょっと調べますね」

猫耳はカードを受け取ると読み取り機？かなにかに当てて確認していた

「確認できました依頼達成ですセリアさんギルドカードをお貸しください」

「あ、ちがうエミリア賊を退治したのは私ではないそこにいる男だ」

「え・・・」

驚いた顔してる猫耳は俺の方を見てる

「失礼しました、それではえーとギルドカードをお貸ししてくださいますか」

「いやもってないけど」

「それでしたら身分証明カードを」

「いやもってないけど」

「・・・」

「・・・」

見つめあう俺と猫耳

猫耳さわりたいなふわふわしてるのかななんて考えていたら横からセリアが話し始めた

「エミリアすまんこの男別の大陸から来たらしいのでギルドカードはもってない、今作ってもらえないだろうか」

俺から視線をはずした猫耳は机の下から一枚の紙を取り出し俺に渡してきた

「あ、はいわかりました、それではこちらに記入をお願いします、名前年齢性別その他に技能などありましたら記入を」

俺は猫耳から紙を受け取るの（・ェ・〇）書き始めようと思って気づく

言葉はなんかしらんけど通じるけど文字も読めるが俺こっちの字わからんぞ

俺はセリアの方を向くと

「セリアこっちの字読めるけど書けんぞ変わりに書いてくれ」

「そうか九十九は字が書けないのか」

なんか勝ち誇った顔で見られた気がした

「いやこっちの字が書けないだけだからな」

「うんうんわかってるわかってる私が書いてやろう」

「なんか腹立つな」

そういつてセリアに代筆してもらった

俺が殺した賊は元冒険者だったが素行が悪く冒険者だけでは食っていけなくなり

賊に身を落とし街道で冒険者や商人を襲っていたらしい先日賞金首として依頼を出したところ

セリアが依頼を受けて今日早速向かったところ俺をその盗賊と勘違いしたってことらしい

登録用紙を渡して水晶に手を当てたら登録完成ギルドカードに賞金の銀貨30枚をもらえたので

俺は満足してセリアと別れてギルドからでたのだった

微妙にオーバーテクノロジーなところがあるんだよな

そうそうギルドのランクは最初はみんなEランクらしいのだが俺はCランクってことになっていた

どうやら賞金首の討伐とセリアが推薦したって形でそうならしい
規約などめんどくさいことは聞いてないだってめんどいし

冒険者ギルドからしばらくセリアから聞いた宿屋に向かって歩いて
いると

案の定後ろから付けてくる奴らの影がまあギルドの中でこっちを睨
んでるあほな奴らがいたのに

気がついてセリアと別れて路地裏までおびき出したんだけどな

「で、お前ら俺になんかようか」

そういうと隠れていたあほ共が5人も出てくる

冒険者っていうかただのヤカラだよなあれ

普通に剣とか斧とかもつとるしゝ（—ε—〇）オイオイ新人いじめ
とかじゃないなこれ

一人の男が俺の方を見て

「兄貴を殺したのはお前か」

ああ、なるほど賞金首って言っても元冒険者だもんな仲間がいて当
然か

「ああ、賞金首を殺したのは俺だがお前の兄貴だったのか」

めっさ睨んでる全然怖くないけど

「兄貴の仇取らして貰うぞ」

「はあ、なんで賞金首殺して敵討ちされなくちゃいけないんだよ、めんどくさいわ」

「やろう共行くぞ」

そういうとあほ共は武器を振りかぶってまっすぐ俺に襲ってきた

○（・・D・'）○ ウン！！あほだ

勝てるでも思ってるところがあほだこれならチート能力なくても殺せるわ

ちつとは考えて襲えよな

まあめんどくさいからいいけど

新人イビリぐらいだったらかるーく痛めつけて終わりにしてやったのに

敵討ちって言うからなこれは殺さないとだめだな

まあいいか、そういうと俺はあほ共の攻撃？をかるーくジャンプしてかわして

山賊から奪ったもとい賞金首くんから奪った剣を上から弟君に振り

落とした

ぐちゃ

うわー気持ちわるう

こういうときは人間だと思っちゃだめだ、あほだあほ俺が殺したのはあほあほ虫だ

うんうん、これは俺の持論だが殺した相手を自分と同じ人間だと思っちゃいけない

なぜならそう思うと罪悪感が体に頭にこびりついてしまい精神を病むからだ

さあーてほかのあほ共も殺すかな

っていない、考え事しすぎた

まあでもいいかこれでまた襲ってくるようならすごいしな

さあーってどうしようかなセリアにはギルドから出る前に言っておいたし正当防衛なら

殺していいって言われてたからな

「返り血どうしよう」

まあどうにでもなるか俺はセリアから聞いた宿に向かうことにした

死体？ 放置ですよそりゃめんどくさいじゃん

カラスでも野犬でもこんな世界だいい餌になると思うよV へ っ ω
'() キヤピィ ☆

風呂入りたい。。(。ω。)。ピー

あほのせいで道草くってしまったがようやくセリアが言ってた宿屋が見えてきた

。十。(ノ・D・)ノオオオオ。十。セリアが表に立ってるよ、
っていうか鎧脱いで普段着？

宿屋の見た目？2階建ての民家まあ看板だけ宿屋って書いてあるよ

「九十九ここが私が泊まっていると宿だ」

「まあいいんじゃないか風呂ってあるのか」

「そんなものあるわけないだろ貴族屋敷じゃあるまいし」

「風呂ないんかい」

俺は頭を抱えた、ないわあああああ

異世界ヤダ（；Д；、）ヤダ

俺はこっちに來てはじめて泣いた

「九十九お前何泣いてるんだ」

「お前にはわからんのか風呂の偉大さが一日の疲れを癒す最高のひと時の時間がお前はあれか風呂はただ体を洗うものだと思ってるのか・・・」

そのあと俺はセリアに風呂の偉大さとどれだけ俺が風呂に入りたいかを説明しまくった

30分後

「風呂っていうのはな」

「店の前であんたらいつまでしゃべってるんだい」

突然声をかけられた俺とセリア振り向くとそこには

（○。・、ω'・。○）ぷっくらなおばちゃんが立っていた

「あんたセリアの知り合いらしいけどうちに泊まるんだろだったらさっさと手続きしてくれないかね」

俺はしかたなく宿屋にはいつていた

おぼちゃんは受付に着くなり

「一泊銅貨60枚ね朝飯は朝7時から9時までの朝食の料金は食べても食べなくても同じだからお変わりはパン2個までそれ以外は追加料金、部屋は二階の一番奥 夕食別料金だから今から食べるなら食堂で食べていきな、それとお風呂はないけどお湯と布ほしいなら言ってくれたら部屋までもってってあげるよ」

「ああわかった」

俺は財布から銀貨3枚渡すとお湯と布を部屋に持ってきてくれと頼んだ

おぼちゃんは銀貨を受け取ると鍵を渡してくれた

「セリアちよつと部屋に着てくれるか聞きたいことがあるんだ」

「風呂の話か（´・ω・｀）」

「いやもういいよ別だ」

そういうと俺は2階の一番奥の部屋に向かった

部屋にはベットと小さなテーブルが一つ

ビジネスホテルか

銅貨60枚で一泊6000円ぐらいか

一食は銅貨5，6枚ぐらいだとかセリアがいつてたし

硬貨全部で五種類 白金貨 金貨 銀貨 銅貨 鉄貨でそれぞれ百枚で同等の価値になる

鉄貨はほとんど使われることはないらしい

っていうか早くお湯来ないかな風呂はもういいとして体は拭いて寝たいわ

コンコン

ドアを叩く音がした

「開いてるよ」

そういうとセリカがお湯の入った桶と布をもって部屋に入ってきた

セリアの事情？

セリアがお湯を持ってきてくれたので俺は服を脱ぎ体を拭き始めた

「お前、私がいるのに」

「え、問題ないだろ、それとも男の裸見るの初めてか」

「そういうわけじゃないがそれで話っているのはなんなんだ」

「ああ、そうだったな」

「お前魔法って使えるのか」

「聞きたいことって言うのはそれか」

「ん、なんだお前を部屋に連れ込んで甘い言葉でもはいて襲うとでも思ったのか」

「いやそういうわけじゃないが」

「じゃあさっさと答えてくれ」

セリアは少し考え込んでから話し始めた

「すまん、私は魔法が使えないんだ」

「魔法ってだれでも使えるんじゃないのか」

「それは・・・」

なんかしらんがセリアは俯き黙りこんでしまった

「なんかようわからんけどセリアに聞いても無理ってことだな、わかった明日にでもギルドで聞いてみるかな」

「九十九・・・」

「ん、どうかしたのか」

「私は魔法が使えない体質なんだ」

「そ、そうなのか」

「ああ、この世界では魔法はだれでも使えるんだ、私は元貴族なんだ」

「で、それが問題なのか」

「魔法を使えないっていうのは平民でも差別されることなんだ、それが貴族、人々の代表とも言われる貴族では・・・表に出せないそれが原因で私は家族から捨てられたんだ」

「へーそれで冒険者になったってことか、めんどくさいことだな」

「・・・お前はなにも思わないのか」

「異世界ぽいなあーと」

「????」

「俺この世界の住民じゃないしな、異世界人なんだよ」

「ど、どういことだ」

おかしな顔をしているセリア

「俺はこの世界に今日きたばかりなんだ」

「別の大陸の傭兵ではないのか」

「違う違う、異世界人だぞっていうか異世界って概念わからんか、こことは違う別の世界な」

「・・・」

混乱してるセリアを置いていて体を拭き終えた俺は疲れたので寝ることにした

体力的にはなんも疲れてないが（＊、艸、）クスクス

「セリア一緒に寝るか」

「あ、あ嫌」

「じゃあ出ててくれ」

「あ、そうだなまた明日な」

そういつてセリアは部屋から出て言った、なんか冷たくないかって
しらんわ興味ないしっていかどうせこういう世界だ貴族と争いにな
ったりいろいろあるんだろうな

明日からが楽しみだ

起きたらそこは知らない天井だった・・・

やっぱこれは言わなくちゃいけないよなあとか考えながら寝ること
にしたオヤスミ——（o・w・o）ゝ——ン

運命の出会いだったらしい

sideセリア

私は今日不思議な男に出会った

いつものように冒険者ギルド適当な依頼を探していた

ランクC賞金首 報酬 銀貨30枚 古の狼へ続く街道に出没する
元冒険者部下2名

元冒険者その名前を見た瞬間怒りがこみ上げてきた

数ヶ月前その冒険者と共に仲間数名と共同で商人の護衛の依頼を受けたことがあった

しかし依頼は失敗

王都へ向かう道中、突如魔物の群れに襲われた数は50数匹

私と仲間の冒険者は声を掛け合い魔物と戦おうとしたその時

奴らとその仲間はこともあろうに商人をおいて逃げ出したのだ

私と仲間他の冒険者達が必死で戦いどうにか私と仲間は逃げることに成功したが

馬車の荷物は荒られ商人の部下と冒険者数名が命を落とした

その後冒険者ギルドでそのことを報告するが奴は別の町へ行って行方知れず

私はその男を殺せることに感謝をしながらその依頼を受けた

古の狼へ続く道を3時間ほど歩いているとなにやら死体を漁っている男を見つけ奴だと思ひ

切りかかったがあっさりかわされてしまう

「いきなり切りかかるなよ俺は山賊じゃねーし」

「貴様死体からなにか奪っていたではないか」

「襲われたから返り討ちにして金目の物もってないなかって探ってただけだろ」

「それは冒険者がすることか」

「いや俺冒険者じゃないし」

「やはり山賊か」

「はあ（・・）ウザ・・」

私は武器を持ち替え奴が動くのを見ようとしたが

すでに奴はいない私は後頭部に強い衝撃を受けた

「き、貴様」

目を覚ますと私は男に紐で縛られていた

奴の名前は九十九

ほかの大陸から来た傭兵らしい

私は当初なにも話す気はなかった奴が盗賊である奴らの仲間である可能性もあったからだ

しかしどうやら違うらしい私は血が上っていて奴を勘違いしていたらしい

そのあと九十九の不思議な魅力に私は取り付かれしもう

用意周到のようでもなにも考えていないような行動

そして風呂にこだわる九十九あれはこまった30分近く話を聞かされたのだ

宿屋のおかみさんが止めてくれなかったらいつまで続いたことか

夜夕飯も食べずに寝てしまった九十九

その前に九十九の部屋で聞かされた異世界人という言葉

勝手に納得してしまった

私が元貴族といっても魔法を使えないといっても本当にどうでもいいことのように

私は彼に引かれているのか、まだわからない

しかしこれから私は彼の傍にすることになるだろうと予感がする

この出会いは運命なのかもしれない九十九は何かをしてくれる予感がするのだ

私は半年契約で借りている宿屋の自分の部屋のベッドで横になっている

九十九顔は渋くて怖い身長は私より高く180ぐらいあるだろうが

引き締まった肉体

今は亡き私の最愛の兄、家族の中でやさしくしてくれた兄そんなことを思いながら私は眠りに付いた

「ぐーぐーぐがああああああああああ」

まあ、なんだ

「あ、知らない天井だ・・・

えた」

よし言

「なにを言っている」

なぜかセリアが扉の前に立ってこちらを見ていた

「いや、この台詞言いたかったんだよ」

「なにかしらないが早くしないと朝食の時間過ぎるぞ」

「え、もうそんな時間か昨日結構早く寝た気がするんだがっていうか時計ってあるのか」

俺の格好はジーンズとパーカー時計なんて持ってないっていうか

そういうとセリアは胸から懐中時計を取り出して見せてくれた

「宿屋の受付にも時計置いてあったのみてなかったのか」

「いや昨日は眠かったし」

俺は眠い目をこすりながらセリアと食堂へ向かうことにした

食堂でパンとスープを食べた俺とセリアは冒険者ギルドへ向かった

「セリアが魔法使えないとなるとどうするかな」

「そんなに魔法使いたいのか、九十九は今でも十分強いと思うのだが」

「まあこれは夢というかロマンだな」

「そういうものなのか、それでどうするんだ」

「とりあえず女将さんがいったけど依頼でもしてみようかな」

冒険者ギルドについた俺とセリアが受付の猫耳っこに魔法を教えて欲しいと言う依頼を頼んだ

ランクD 内容 魔法の基礎知識を教えてください 報酬 銀貨10枚
「エミリアどれぐらい掛かるかわかるか」

「この条件なら午前中には見つかると思うから午後また着てくれたらいいわ」

「わかった、九十九武器やでも見に行くか」

「そうだな、そうするかな」

俺はセリアの提案で武器屋を見に行くことにした

呪いの武器って定番かw

武器屋にやってきた俺とセリアは気の良さそうなおっさん店主

まあドワーフだな髭すげえってなことを考えながら、かるーく挨拶を交わした後

店の中にある武器を見始めた

短剣に片手剣両手剣、斧に鈍器、弓矢に槍それが無造作に壁に立てかけられている

俺は端から順番に遣さそうな武器の感触を楽しんでいるとセリアに声をかけられた

「九十九こっちだ」

「（＊´ーω・）ン？どうした」

「そこらへんに置いてある武器は大量生産で作った武器を置いてあるだけだ裏に本物がある」

「本物ねえまあいいけど」

俺はセリアに言われるまま歩いていくとそこには先ほどとは明らかに違う武器が綺麗に並んでいた

「。十。(ノ、・Д・)ノオオオオ。十。すごいなこれ」

「どうだわしを選んだ傑作は」

「これあんたが作ったのか？」

「わしが目で見つけた物じゃ、お前さん腕が立つようじゃないかこの武器の中から武器を一つ選んでみな」

「わかった」

どれがいいかな、お、これ日本刀じゃね洋刀もいいけどやっぱ日本刀かな

んーどうもしっくりこないな

こっちの槍もいいなもって歩くのめんどくさいな

。十。(ノ、・Д・)ノオオオオ。十。なんだこの紫色ぽい瘴気？
漂う長剣

これ良さそうだな

○(、・Д・)○ウン！！いいこれいい

「汝 我を 持つに 相応しいか 者か」

「だれ？」

「我は 長剣 成り 力 在る者を 求める」

「武器がしゃべるんか、うん面白い、お前俺が使ってやる」

「我を 持つに 相応しい 者で在るか 貯めさせて貰おう」

そう長剣が言った瞬間俺は強烈な痛みを全身に浴びたので頭にきたので長剣を押し折ってやった

「な な 我を」

「五月蠅いぞ剣 俺がお前を選ぶんであってお前が俺を選ぼうとしてんじゃねえよ」

「また同じことしやがったら粉々にするぞ」

「我を」

「返事は・・・」

「わかった」

ドワーフのおっさんがすこし腰を抜かして倒れているのが見える

セリアは呆れてる？

「なあおっさんこれちょっと整えて双剣にできないか」

「ああああ、べつに問題ないが まさか呪剣を選ぶとなセリアが認めた男だけのことはある」

そういうとドワーフのおっさんは俺から折れた長剣を受け取るとどこかへ行ってしまった

「なあセリアこれからどうする武器はあれでいいとして出来るまで暇だしまだお昼まで時間あるだろ」

「そうだな九十九は防具とか必要か」

「んーべつに必要ないな・・・丈夫なコートがあったら欲しいけど金もないしな、というか武器のお金足りるんΣ（・Д・）カツ！？」

「それは問題ない私が払っとく」

「じゃあどうするかなちよっと早いが飯でも食べに行くか」

「そうだな」

そういうと俺とセリアは飯を食べに武器屋を出たのであった

「武器が話すのにも肝が冷えたが武器折って黙らせるとか長生きしてみるもんじゃの」

ドワーフのおっさんは武器を成型しながらつぶやいたのであった。。

美少年って

町の中心部食堂が立ち並ぶ道を歩く俺とセリア

「でセリア俺店しらんわ、どっかおいしいところないか」

「それじゃあ私がいつも行く店行こう」

そういつて連れて行かれた俺だがなんだこのぼろぼろの喫茶店は

「・・・」

「どうした九十九早く入るぞ」

そういつて一人入っていくセリアじゃあないからついて行くけど

「マスターいるか」

「あーん（＊、＊）」

ちょっと強面のおっさんが奥から出てきた

セリアの知り合いはおっさんばかりか

「オムライス2人分頼む」

「あいよ」

そういうとマスターは厨房に引っ込んでいった

「九十九そんなところで立ってないで座ったらどうだ」

「ああ、そうだな、ここうまいのか？」

「うまいぞ店はぼろいけどな早いうまいそれに安いし、オムライス二人前で銅貨8だからな」

「そうか」

その後すぐおっさんがオムライス2皿もってきた

愛想はなかったがオムライスはうまかったので俺は料金を払ってお店を出た

そのあと町を適当に見て回り時間も時間なので冒険者ギルドへ行くことにしたのだった

冒険者ギルドにつくと猫耳がセリアに声をかけてきた

「依頼受けてくれる人見つかりましたよ、それもAクラスの魔法使いさんが、今ギルドの待合室で待っててもらっていますから呼んできますね」

「ありがとうエミリア」

そういつてエミリアは走って去っていた

「Aクラスか私より強い魔法使いがこんな依頼を・・・」

「まあ、ちょこっと魔法教えるだけで銀貨10枚だしいいんじゃないのか、しっかりした奴じゃなかったら縛り付けて聞くだけだし問題ないだろ」

「九十九・・・お前」

「なんかおかしいこと言ったか？、俺を騙そうって奴は痛い目みしたらいいんだよ」

「もうなんかお前はすごいな」

数分後

エミリアが戻ってきた横にはローブを纏った青年を髪は金髪 顔立ち
ちは、

なにこの美少年あれかあれなのか異世界って言うのは美少年が登場するのが当然なのか

「お待たせしましたセリアさんに九十九さん、こちらが依頼を受けてくださった冒険者です」

「はじめまして、ライアスといいます若輩者ですが魔法学校で魔法を学んでおりましたのである程度のことなら、お教えできると思います」

そういつて頭を下げてきた美少年、
 ○（・D・）○ウン！
 ！好意印象

俺は彼の方を向き丁寧に挨拶をした？

「魔法についてなにも知らないので詳しく教えていただけたら幸いです」

そういつて軽く頭を下げる俺

ちょっと（＊、ロ、ノ）ノびっくりしてるセリアもよろしくお願い
しますという俺とセリアとライアスはエミリアから聞いた町外れ
に歩いて向かうのだった、

（。、・、∩・）エッなんで丁寧かってだって相手が丁寧にしたらこ
っちも丁寧にするよ

俺は基本相手と同じ対応してるし、もし偉そうな魔法使いが着たら
ボコボコにするけど（・∇・）

ラミアス先生

町外れの空き地に着いた俺とセリアとラミアスが早速

ラミアスから話を聞くことにした

「それでは魔法というのは自分内にあるマナをまたは世界に存在するマナを用いて言霊または術式を用いて奇跡を起こすものです、お二人はマナを感じられますか」

「ようわからん」

「わたしはマナがないみたいで」

「そうですか、おかしいですねお2人共すでに魔法を使われているはずです」

「（。´・D・）エッまじでなにそれ」

「わ、私が魔法を？」

「おそらく無意識に使われていたのですね、魔法とは火、水、雷、風の属性などを生み出す物と勘違いされているようですが実際には属性などなくありとあらゆる魔法を誰もが使えます、正しまれに内部マナを放出できない方は魔法を使えないと勘違いするのです」

「ってことは火とか俺らは出せないのか」

「いえいえ訓練さえすればだれでもその差はありますが使えるよう

になります」

「それじゃあ私は」

「はい、魔法をうまく使えないだけです」

にっこりと笑う美少年・・・嫌味がないなんてすごいやつなんだ

「属性はないと申しましたが相性というものはあります、たとえば火が得意な方、水が得意な方、転送や回復が得意な方などそれぞれ人によって得意な分野があるのです、それとマナを放出できない方の多くは強化魔法が向いている方が多いようです」

「なるほど、それで早速んだけどライアス魔法使ってみてくれな
いか」

「構いませんがお二方は魔法を見たこともないのですか？」

「俺はないぞ」

「私があります」

なんかセリアかわいくなってるか— ヨエ・・—

「そうですか、それでは火の初級魔法を（火の精霊よ私の問いに答え姿を現せファイア）」

そういった瞬間彼の右手の手の平に小さな火の玉が姿を現した

「。十。（ノ、・∩・）ノオオオオ。十。すげえ・・・さわったら

熱いのか」

そーと手を出す俺

「熱っ、、、これ出来たらライターいらんやん」

「ライターがなにかわかりませんがさわったら熱いですよ本当に火ですから」

「教えてほしいんだけど、それいつまで燃えてるんだ燃えるようなものないよな」

「そうですね、薪とかと違いこれは私のマナを燃料に燃えているんですよ」

「なるほど、それじゃ次水って出せるのか」

「それでは水ですね水の初級魔法を（水の精霊よ我の問いに答え姿を現せウォーター）」

そういった瞬間また彼の右手の手の平に小さな水の玉が姿を現せた

「。＋。（ノ、・∩・）ノオオオオ。＋。すげえ・・・けど今度はどうやって水出してるんだ？」

「私も詳しくわかりませんが空気中にある水を集めると言われています」

「それにマナを使ってるってことか」

「はい最初に集めあとは維持ですかね」

「言霊って雷とか風とかほかも一緒か」

「はい魔道書に初級中級上級魔法の言霊は書かれていますね、そのほかに術式を必要とする魔法もあります、だからといって上級の言霊を使うとマナを大量に持っていかれるのですぐに気絶下手をすれば死ぬこともあります」

「よーしやってみよーと」

そういうと俺は手を出して言霊？

「（水の精霊よ私の問いに答え姿を現せウォーター）」

その瞬間手の平に小さな水の玉が。。。（。・。・。・）エッこれがかすぎね

そう俺は初級魔法を使ったはずなのだが直径一メートルはある巨大な水の塊が

「やばやばこれどうしたらいいんだ」

「どこかに投げつけてください」

俺は言われたとおり水の塊を適当に投げた

ド——m9（＊、△、＊）——ン！！

巨大な水溜りが

「・・・」

「・・・」

固まるセリアとライアス

「なるほど、でライアスお前魔法消し去ってたけどあれどうやるんだ」

「九十九さん先にそれ習ってから使ってください」

「なんか、 $m(o \cdot \omega \cdot o)$ mごめん、使えるとは思わないジャンd($\cdot \omega \cdot o$)」

「いやそんなかわいくいわれても、それにしても九十九さんはさすがですね」

「(＊'ーω・)ン? 所謂いえばラミアス」

「なんですか」

「お前俺のこと知ってるのか」

「はい、昨日路地裏で冒険者を切り殺したの見ていましたから」

「まじかだれかに見られてる気配なんてなかったんだけどな」

「それは私も位置をAクラスの冒険者ですから、、といたいところですが本当は透視球で見てただけなんですよ」

「なんだその透視球って」

「魔道具といわれる物で透視球といわれる遠隔から特定の場所を見る魔道具なんですよ」

「ふーんそれで俺に興味もってこの依頼を受けたってことか」

「はい、師匠に言われていた通りです」

「師匠ねえまあいいや、それよりセリアいつまでそこで頑張ってるんだ」

そうセリアも同じようにさっきから水を出そうとしているんだがいつこう出来ないでいた

「セリアさん」

「はい」

「セリアさんはまずはじめにマナを放出する方法を教えますから」

「あ、はい」

「それでは九十九さん」

「ん、なんだ九十九さんは制御の方法を出来るまで魔法は禁止です」

「エェッ○」＊、△、＊ト○まじか」

「はい、あ、それから今日は依頼料もらいますが明日から依頼料いりませんから」

「っていうかなんでラミアスお前仲間になろうとしてるん？」

「師匠に言われていましたから、数年後この地に英雄の資質のあるものが現れる、お前はそのものと共に進めと」

「まあ、いいか魔法ただで教えてくれるらしいししな、セリアお前もいいだろ」

「あ、ああっというか私はすでにお前の仲間だったのか」

「嫌か嫌ならべつにいいぞ、今日からラミアスにわからんこと聞けばいいしセリアよりわかりやすいし」

「な、それは困る、私の方が先に九十九を見つけたんだから九十九は私の物だ」

「いやあ俺ものじゃねーしなんかおかしなこといいはじめてるし、まあいいけど」

その後俺とセリアはラミアスから魔法についていろいろ教えてもらった

人物紹介なのか

あれから俺とセリアは一緒に宿屋に戻り食事をした

今は宿屋の自分の部屋で魔法の制御 桶の水を浮かせる練習をしている

これが一番いいらしいとライアスに言われたセリアはセリアでなんか魔道具？に魔法と注ぐ

練習をしてた

ライアスは自分の家に帰っていったが明日の朝ギルドで待ち合わせている

さて暇なので俺が出会った人の事でも話そうか

まあ最初に俺こと九十九

異世界人 地球にいた時は一人暮らしのフリーターのあんちゃんだ
年は28歳

結婚はしてないが彼女はいたが最近微妙だったので問題ない

日本にいる時は引き篋もり金は昔の貯金を切り崩して生活してた

傭兵だって話したはずだが実際はちょっと違う訓練なんて受け取らん
軍隊にもおらんぞそれでなぜ傭兵？ 答えは簡単、俺は旅行が好きで
世界中旅を旅して周りって

思っって旅行好きが引き子守ってまあいろいろあんねん、それは
置いいて

中東の某国まあ国は言わんけど行った時運悪くテロ組織の兵士にな
っちゃった（＊、艸、）クスクス

まあ親切にしてくれてた人がテロ組織の結構偉い人で流れて運び屋
ぽいことしたら

あれよあれよといろいろ仕込まれて傭兵にまあその親切にしてくれ
た人たちもいつの間にか

捕まったり殺されたりしていろいろあって日本に戻ってのんびり過
ごしてたら異世界に来ちゃったって

感じだ（、・、）のウン！！わかりづらい、まあええねん

俺のことはこれで終わり次はセリアのことかな

年は22歳、若い見た目十代かと思ってたよ

身長高い体重はしらんけど筋肉は結構ありそうでもデブではない

元貴族なんだってどちらかといえば騎士って感じなんだけどな

過去にいろいろあったらしいのだが俺は興味なし過去なんて基本どうでもいい

今が大切だからな

次はエミリア猫耳受付嬢だな

年は19歳最近ギルドに入ったらしいセリアとは仲良しらしくたまに一緒に買い物も行くらしい

冒険者ランクCって言うんだから結構強いのか？獣人だそうだ

昔差別を受けていたらしい獣人を毛嫌いしてるやつも結構いるとか

まあ俺がそんな奴見つけたら殺すけどな猫耳は重要文化財だあ

(。´・д´) エッさつきからちよくちよくおかしいってまあ仕方ないよ

日本にいる時にアニメとか萌え萌え・・・(＊ーд＊) ハアハア・・・物見てたらは嵌ったw

それで引き籠もりにつて俺のことじゃなかったなエミリアだエミリア彼女回復魔法使えるぽい冒険者が怪我して戻ってきたら結構癒してもらってるらしい

その為にわざと怪我してくる兵もいるとかすげえ

次はライアスかな

年は21歳やつは魔法使いだ以上・・・

終わりがあってそりゃ男の紹介なんて適当でええやろ

明日の予定 武器やおっさんから武器を受け取り

俺セリア、ライアス三人で適当な依頼を受けることになってる

それじゃ魔法の練習も飽きたし寝るかな

そうそう昨日12時間以上寝たのは魔法を使いすぎたせいらしい肉体的に疲れてなくても

魔法を使うと睡眠が必要になるそうだライアスがいったからたぶんそうなんだろ

っていうか俺どれぐらい強い（＊´ω・）ン？

セリア曰く私の2倍は強いそうだ ライアス曰く魔法を覚えたらSクラスも夢じゃないらしい

っていうことは現状補正があるとしてもA＋ランクぐらいかな

さて寝まーす、（人ω人）。＊。★おやすみなさい★。＊。

エミリアの猫耳さわりたい

翌日俺は予定通り武器屋のおっさんのところに双剣を取りに向かった店に入る俺とセリア

セリアはもうなんか常に一緒にいるな、まあ別に構わんけど

「こんちわ、おやっさん双剣出来てる？」

「おお、昨日のあんちゃんかい、出来てるぞ」

そういうと棚に置いてあった布袋から紫色の二振りの短剣を俺の前に置いた

「これかぁ結構かつこいいな」

俺はその短剣を両手に持つとかるーく振り回した

「おいあんちゃん店の中でそう武器を振り回されても困るんだが」

「あ、、すいません（＊・ω・＊）――（ ）ペコリン」

そのあと俺はおやっさんから黒い皮のベルトと黒いグローブを貰ってお店を出た

セリアがおっさんとなんか話をしていたがまあどうでもいいか

ギルドについた俺とセリア

「九十九さんにセリアさんおはようございます」

ライアスはギルドに先について待っていた

「おはよう、それじゃ早速依頼でも探すか」

「そうですね、どのような依頼にしますか」

「討伐がいいかな護衛とかめんどいし守りたくないような奴ならいらつときて俺が殺しちゃうかもわからん」

「彼方なら本当にやりそうで怖いです」

「まあ簡単すぎてつまらん依頼もやなんだけどな」

「それは困りましたね、Bランク以上で3人の依頼となるの月に1つか2つあればいい方ですからね」

「そういうものなのかセリア」

「そうだなチーム組むわけだしあればいいけどな」

そんなことを話しながら俺は依頼が張り出されている掲示板を見た

ランクB トロル・ギガントなど殲滅鉦山の安全確保 報酬金貨5枚
チーム推奨 場所クレイア鉦山

ランクB 王都までの護衛 報酬銀貨20枚 10名 残り4名

「(＊'ーω・)ン？これ両方ランク一緒だけど報酬だいぶ違うのか」

「それはチームと個人の差だなチーム推奨の方は報酬多いけど基本チームを組んでいないと受けない」

「ふーん俺らってチーム組んでるってなるのか」

「問題ないぞギルドとしては安全を考慮して複数の人間で任務を行って貰う為にチームを組んでもらう、冒険者側もチーム結成して気の会った仲間とチームを組むものも多いからな」

「チーム申請するとなんか変わるのか」

「別に得点ってほどのことはないが複数のチームに所属してるものもいるからな」

「それじゃあこのトロールとギガントって奴やるか、ライアスもこれでいいか」

「ええ、問題ないです」

「私も問題ないわ」

依頼書をはがすして受付のエミリアに渡す

「これ受けたいんだけど」

「これですかたしか九十九さんはCランクですよ、それにこの依頼はチーム推奨なので個人では受けられないのですが」

「じゃあ先にチーム申請よろしく」

「俺とセリアとライアスの三人でよろしく」

「かしこまりました、それではこちらの紙に代表者の氏名とランクメンバーの氏名とサインをお願いします」

エミリアの猫耳かわいいなっていうかさわりたいなあってなことを考えながら

「これでいいか」

「ちょっと待ってください・・・はい結構ですそれでこちらの依頼の方なのですが」

「なんか問題でもあるのか」

「バノ≧▽≦」 イエイエ！こちらはギルド職員が付き添う事が必須となりますので私も行くことになりますがよろしいですか」

「そうなのか」

「はい、私位置をギルドランクはCで回復魔法と槍を使えますので

足手まといにはならないかと」

俺はちょっと疑いの目を（「3」）ジロリ！！

セリアが後ろから声をかける

「九十九エミリアは結構強いぞ私も一緒に依頼をする事もあるからな」

「依頼ってギルド職員が受けてもいいのか」

そういつてエミリアを見ると

「はい、依頼には期間が書いてありますが冒険者が請け負わない依頼などは戦闘が出来るギルド職員が臨時で請け負うことになっています、この依頼は2週間経っていますし現状がどういう状況かわかりませんし不測の事態も考えられる為特別にギルド職員が付き添うことになっております」

「なるほど、よろしく（ノ。＜ω＞）」

「はい、それですぐ向かわれるのですか？」

猫耳いいなエミリアちゃんかわいいしウ——σ（・ゝω・ゝ；）——ン

「私も準備がありますので一時頃東門で待ち合わせという事でよろしいですか？」

一緒にチーム組んだら、その猫耳さわらせてくれるかなウ——σ（・

‘ω・ゝ；）——ン

「セリアにライアスそれでいいか」

「ああ、エミリアと久々に一緒に冒険か楽しみだな」

「エミリアさんとチームですか仲間が増えるのはいいですね」

「それでは皆さんあとで」

「そういうとエミリアは奥の階段を駆け上がっていったミ（ノ
ー）ノ||3ドテッ！」

こけてる（；　・ゝ　㍀・ゝ）　本当に大丈夫なのかちょっと不安だ

それから俺たちは旅の準備の為買出しに行くことにしてギルドを後にした・・・

「あの・・・なぜ私なのでしょうか」

「それはお前が・・・」

だからだ」

「はぁわかりました」

イベント起こらんとかないわw

東の城門で待つ俺・・・

暇だ早く来すぎたかな、今俺は一人ここで待っている

まだかなあの後セリアはちょっと寄る所があるとかいってどっかいったし

ライアスは師匠の家に寄って持ってきたい物があるとかいってどっかいったし

ああ暇だな、先いってようかな

「お待たせしました」

下を向いていた俺は突然声をかけられた方を向くとそこには

めっさ長い槍を持ってる茶色い猫耳っこがエリアスカ可愛いな・・・

「あの・・・そんな見つめられても困るんですが」

どうやら俺見つめていたらしい

「ああ、ごめんごめん猫耳さわってもいい?」

「え、え、それはちょっと」

「だめかぁシヨボ——（ゝ—ω—ゝ）——ン」

「少しぐらいならいいですけど」

「まじでまじでワァ——〇（。ゝ・▽・ゝ。）〇——ィ♪じゃあ少しだけ」

俺は念願の夢本物の猫耳をさわってみた

うん、なんだこの感触。＋。（ノゝ・∩・）ノオオオオ。＋。すごいすごい

ふわふわとそしてぽんによぽによと弾力がありながらやわらかいそしてこの香りは・・・

「あ、くすぐったいんですが、ゝ、あう」

「ああ、ごめんごめんあまりにも素敵な猫耳だったから感動してつい」

「ゞノ≧▽≦）イエイエ！九十九さんは獣人に興味が?」

「おうおうあるぞめっさある食べちゃいぐらいあるぞ」

「え、食べるんですか」

ちよっと後ずさるエミリア

「いやいや、本当に食べたいって意味じゃないぞ、それぐらい可愛いと」

そういうと今度は少し頬が赤くなるエミリア、めっさ可愛い

「ありがとうございます、それでセリア姉さんとライアスさんは？」

「ああ、あいつらはまだ見たいだな、まああいつらが来ないからエミリアと二人つきりになれたんだしいいことだいいことだ」

「え、」

その後エミリアと楽しくおしゃべりしているとセリアがこちらにやってきた

赤い髪に整った顔立ち騎士を思わせる鎧に巨大な剣、剣でか2メートルぐらいあるんじゃないかね

「おお、遅れてすまん、武器屋のおやじに修理を頼んでいた私特製の大剣を貰っていてな」

「いえ、さっき着たばかりなのでそれにしてもいつみてもすごいですね、その大剣は」

「エミリアのその長槍もすごいけどな」

それにしてもこっちの人間は化け物かあんな武器軽々もてるんだから俺でも補正なかったら無理だぞ

その後セリアを加えて三人で世間話をしながら待っていると最後の奴がようやくやってきた

小走りに走ってやってくる魔法衣に身を包んだ美少年どこぞの杖？古びた杖に結構な荷物

「はあはあ遅れて申し訳ない、師匠がなんかノリノリでいろいろと荷物持たせてくれたのはいいのですがそれがあまりにも多くてすいません」

「まあ、別に構わんど、俺急いでないしエミリアの猫耳さわれたし問題ないぞ」

「な、九十九私はそんな話聞いてないぞ」

ちよつとびっくりしているセリア

「いや、べつに隠していたってわけじゃないけど」

「九十九はエミリア見たいなのがタイプだったのか」

「んータイプとはちよつと違うんだよな趣味だな猫耳って可愛いじゃん」

なんか頬を赤く染めてだまっているエミリアとちよつと涙目なセリア？

「セリアはセリアで可愛いけどな」

「九十九さんそれもどうかと」

「（＊´ω・）ン？なんかおかしいなと言ったか」

「いえ、それじゃあ行きましようか」

そういうラミアスでっかい荷物と杖をもって門をくぐって行く

「おう」

俺もその後を歩いて行くのであった

セリアとエミリアも慌てて追いかけてくる

「なあラミアス」

「はいなんですか」

「キレイア鉱山までどれぐらいかかるんだ」

「徒歩で3日ぐらいですかね」

「まじか」

「はい」

「ってことは野宿か」

「そうなりますね、九十九さん野宿はじめてですか」

「いやそんなことはないが準備なんてしてないぞ」

「まあそうだろうと思って荷物大目に持ってきたんで大丈夫です」

「。＋。（ノ、・皿・）ノオオオオ。＋。お前いい奴だな」

「そうですか、戦闘になったら私は後ろで魔法打ってるだけですからそれぐらい当たり前ですよ」

「うんうんいいやつだゲームとかラノベとかだと生意気な魔法使いが多いからな、攻撃力しかないくせに偉そうな魔法使いとか、張った押したくなるからな、まあ実際ゲームでそんなキャラ使ってた奴をオフ会で泣かしてやったけどな（＊、艸、）クスクス」

「ところどころわかりませんが私を殴らないでくださいね」

「おお大丈夫大丈夫、仲間になったら多少のことじゃ怒らんぞ」

「そうですかあ、でもそういう魔法使い多いですよ国に仕えてる方は」

「まじか、そんなやついたら殴っちゃうかも」

「それにしてもセリアさんとエミリアさんは仲がいいですね」

前の方を歩いている女の子2人前衛が女の子2人ってどうよ、まあいいか

「そうだな、お前はどっちがタイプだ」

「え、私ですか私はおねいさんタイプがいいのでどちらもタイプでは」

「そうなんか、ラミアス君はシスコンとΦ（・ェ・O）メモメモ」

「え、どうしてそうなんですか」

（＊、艸、）クスクスなど楽しく進んでいった

それにしても野生の魔物とか全然出てこないんだけど

山賊とかなんか出来てもよくね

数時間後日が沈み野宿をする場所も見つかり夕飯を囲んでいる俺達
4人

「そういえばトロルとギガントってどんな魔物なん？」

「トロルは3メートル緑色の皮膚に巨漢で巨大な棍棒を振り回し襲ってきます、Bクラスモンスターに認定されていますギガントですがこちらは5メートル青色の皮膚です武器は持たず素手で襲ってきます、こちらもBランクモンスターですがどちらも単独行動が多いです」

右横に座っているエミリアが説明してくれた

「そっかそっか」

その後食事も終わり、ぐだぐだ会話をして親睦を深めていった

2時間ごと順番で見張りをすることにして俺は眠りについた

最初はライアス次はエミリア次はセリア最後は俺だ

イベントないなら作ればいい

次の日も俺たちはただひたすら歩いていた

「ああ暇だ」

「しかたありませんよ、旅なんてそんなものです」

「ああ、車ほしい」

「馬車は軍か貴族か大商人ぐらいしかもてないですよ結構高いんです」

「そうなのか、まあ俺が言ったのは馬車じゃないけど、こっちじゃそうだろうな」

しばらく歩いていると前方から馬車が3台こちらに向かって来る

先頭には従者ぽい奴と護衛の兵士ぽい奴らが数十人

様子を見てみると馬車の荷台には首輪を付けられた人が何人か乗せられている

俺はセリアに話しかける

「なんだあれ」

「奴隷商人だな」

「ふーんこっちじゃ奴隷って当たり前なのか？」

「・・・」

「まあいいやあの馬車奪うぞ」

「は、お前何言ってるんだ」

「俺は奴隷って制度が嫌いなんだよ、なんか文句あるか」

「いや奴隷はこの国では認められている商人を襲えば私達はお尋ね者だぞ」

「証拠残さなければいいだけだろ」

「まっってください」

「なんだエミリア」

「私はギルド職員です、道中何があったか報告する義務があります」

「ふーんじゃあ奴隷制度お前は正しいと思っているのか」

「それは奴隷とは犯罪者などを」

「そんなもん殺すか重労働させたらいいだろ、どうせ小さな村で税が払えないとかで奴隷に身を落とすとかあるんだろ」

「それはしかたないことで」

「はあそんなもんその領主がしっかり領地を運営してないだけだろうが、まあいいやお前らに言ってもしょうがない、ただ邪魔はするなよ」

そういつて俺が馬車目掛けて走り出そうとするとライアスが声をかける

「ちょっと待ってください」

「あーん」

「そんな睨まなくても私は彼方を見守るようにいわれているので彼方がすることに一々文句は言いませんが私も何か出来ることがあるのではないかと」

「そういうことか、じゃあラミアスお前は俺が取りこぼした人間の始末を頼んだ、それじゃあ行くぞ」

「ああ私もやるぞ」

そういつてセリアも俺の後をついてくる俺は馬車の前に出ると馬車の車輪をかるーく

かるーく蹴り壊した、急に止まる馬車から長身の女性が出てきた

「貴様何者だ」

「いやあ歩いてるの疲れたから馬車でも奪おうと思ってな」

「盗賊かなにか我らをだれだと思ってる大商人ドーラの馬車だとわかっての所業か」

「いやしらんけど、大商人とか自分で言ってるしあほだな」

「おい、お前達この者どもを殺せ」

そういうと護衛の兵士はいやつらが俺目掛けて武器を振りかぶりながら走って近づいてくる

（火の精霊と土の精霊をちょっと力貸せヴォルケイノ）

と適当に溶岩魔法をぶつけてやると奴らはどろどろになって溶けていった

「ああやりすぎたか」

女商人は慌てて逃げようとするが

「だれが逃がすかばけ」

そういうと俺は奴のところまでジャンプしてかるーっつく殴る

女を殴るなんていやいや女だろうと関係ないそういうこと言ってる奴に限って女性を差別してるんだよ

とどこの誰にいったるねんって突っ込みはどうでもいいとして

「九十九さんやりすぎです」

（。ゝ・∩・） エッどうかしたかラミアス

「あれ見てください」

ああなるほど溶岩魔法で地面が凹んでるこれはさすがにやりすぎたかエヘヘ（＊ゝ・▽・ゝ・＊）ゞ

「それで商人襲ったのはいいとしてこの奴隷達どうするつもりだ」

セリアが奴隷達が乗っている馬車を見ながら声をかけてきた

「ああ、どうするかな」

「考えてなかったのか」

「まあいいやとりあえず奴隷達でも出すかな」

そういうと俺は奴隷が乗っている馬車の鍵を壊した

「あの鍵ありますけど」

「（。ゝ・∩・） エッ鍵あったのもっと早く言ってくれよライアス」

馬車から出来てきた男8名と女5名

「セリア首輪って外せないのか」

「首輪には魔法が刻まれている無理だ」

「ラミアス解除とかできないのか」

「出来ないはずですが、無理に解除すると首輪もろとも吹き飛ばよう
になってるはずですよ」

ウ——σ（・ゝω・ゝ；）——ン

「ちょっとお前来い」

奴隷男一人をこっち手招きして呼ぶ俺

「お前なにやって奴隷になったんだ」

「・・・」

「はあしゃべれ早く」

「俺は友人を殺した」

「ふーん、殺人かそれはなんでだ」

「裏切られてた・・・」

「まあなんか事情があったんだな」

そういつて俺はその奴隷の首輪に手をやると

（拘束を解き放てキャンセル）

首輪は光り輝いて外される

「おお前どうやったんだ」

驚いているセリア

「（＊´ーω・）ン？魔法だけど」

「そんな魔法見たことないぞ」

「いや今作ったし」

「魔法って作れるのか」

「あのあとラミアスに魔道書借りただけど魔法って創造出来るイメージさえあればなんでも出来るらしくて初級魔法とかは過去の魔法使いが簡単に言霊だっけそんなの作ったばかりだから出来るんじゃないかって思ってたな」

呆れるセリアとなんか憧れてる目？で見つめているライアス

俺は次々に奴隷達の首輪を外して行ってやった

「それでこの奴隷達どうするつもりだ」

「どうしようかな」

奴隷達の方を見る俺、奴隷達も俺の方をめっさ見てる

「お前ら好きなようにしな、もう首輪はないんだから自分の里に帰りたいなら帰ってもいいしかえる場所ないなら自分で勝手に見つけ

る俺に付いて来たいなら別にかまわんけど奴隷はいらんからな」

そういうと元奴隷達は目をまるーくしてる、そんな状況でセリアが俺に何かいつてくる

「それはあまりにも乱暴すぎないか、これはお前がやったことだろう、それにこの中には本当に犯罪者がいるんだぞ」

「エェッ○」＊´∩´＊∟○俺は奴隷制度が嫌いなだけだしべつに後の事はしらんよ」

「そんなことをしてこいつらがまたなにか犯罪を犯したらどうするんだお前の責任だぞ」

「それこそ俺の責任ちゃうわこいつらが犯罪犯したらこいつらの責任だぞ」

「お前がこいつらを逃がしたから起きたことだと思わないのか」

「それをいうならこいつらを奴隷にしたやつらの責任だ一般人も含めてな、今まで奴隷を認証してきた奴らがどうなろうと俺の知ったことじゃない」

言葉を失うセリア、まあ俺の考えがわからんなら離れていくだけだどうでもいい

そんなことを考えているとライアスが声をかけてくる

「それはいいとして九十九さん奴隷を解放したら私達のが商人を殺したことがばれますよ」

「それなら問題ないっと思うぞ」

「なぜですか」

「元奴隷のいう事と冒険者のいう事どっちを信用する？まあお前達が裏切ったらそんな時はそんな時だ」

「私は問題ないとしてセリアさんは・・・まあ大丈夫でしょうでもギルド職員でもあるエミリアさんはさすがに」

先ほどからだまって俺たちの方を見ていたエミリアに声をかける

「エミリア」

「はい」

「お前も奴隷だろ？」

「なぜそのことを」

「やっぱりか、なんとなくそんな気がしたんだ」

「え、エミリアが？」

驚いているセリア

「はぁお前わからなかったのか、街に獣人なんていなかっただろってことは獣人は人間と仲良くないってことだろどうせ人間至上主義とかなんかあるんだろ、そんな世界で獣人がギルドで働いているん

だなんかあるって思わないのか」

俺は元奴隷達の方を向く

「さっさと決めろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305z/>

異世界(。´・д・)エッ

2011年12月7日12時46分発行